

事業報告書

令和 5 年 度

自 令和 5 年 4 月 1 日
至 令和 6 年 3 月 31 日

一般財団法人 青少年国際交流推進センター

目次

令和5年度事業の概況	2
1. 青少年国際交流事業の企画、実施及び協力の概況.....	2
A. 青少年国際交流スタディツアーの実施	2
B. 国際交流リーダー養成セミナーの実施	3
B-1 国際交流リーダー養成セミナーの実施	3
B-2 「イスラームを知ろう！」の実施.....	4
C. 国際理解教育支援プログラムの実施	5
2. 内閣府等の実施する青年国際交流事業への協力	6
A. 内閣府の実施する青年国際交流事業への協力	6
B. 他団体の国際交流事業への協力	17
3. 青少年国際交流に関する啓発及び研修の概況	17
A. 推進委員会議	17
B. 第30回青少年国際交流全国フォーラム	17
C. 団体会員のブロックイベント(青少年国際交流を考える集い)	18
4. 青少年国際交流に関する出版物の刊行及び広報活動の概況.....	18
A. 機関誌の刊行	18
B. 年報の刊行	18
C. ホームページの更新・オンラインメディアの活用.....	18
D. 一般財団法人青少年国際交流推進センターパンフレットの配布	19
5. 青少年国際交流に関する情報収集及び調査研究の概況.....	19
A. 青少年国際交流事業に関する情報収集	19
B. 青少年国際交流に関する調査研究	19
6. 青少年国際交流に関する支援・コンサルティング等の概況.....	19
A. 活動奨励金等の交付.....	19
B. コンサルティング事業等.....	19

令和5年度事業の概況

1. 青少年国際交流事業の企画、実施及び協力の概況

対面及びオンラインを活用したセミナーを実施

A. 青少年国際交流スタディツアーの実施

国際交流活動に関心と意欲のある青少年を各国に派遣し、ホームステイによる交流、訪問国青年との交流や視察・調査等を通じ、青少年国際交流について理解を深めてもらうことを目的として実施する。

「タイ王国・スタディツアー2024」

本年度は、令和6年3月18日（月）～3月26日（火）の8泊9日の日程で「タイ王国・スタディツアー2024」を実施し、大学生及び社会人を含む参加者9名と同行職員2名の合計11名が参加した。

このスタディツアーは、タイの児童養護施設3か所を訪れ子どもたちの生活環境を知ること、現地で行われる子供キャンプ「For Hopeful Children Project (FHCP) 2024」にボランティア・スタッフとして参加し、現地の実行委員と協働することを組み合わせた、（一財）青少年国際交流推進センター独自のプログラムである。子供たちとは、生活や活動を通じてコミュニケーションを深めた。

FHCPは、「東南アジア青年の船」事業タイ既参加青年ウイスット・デッカムトーン氏（Mr. Visit Dejkumtorn）が、自身のネットワークをいかして1991年に始め30年以上にわたり継続している慈善事業で、孤児や難民、障がいを持っているなど社会的に恵まれない状況にある子供を、「希望あふれる子どもたち（Hopeful Children）」と呼んでいる。今回は、約800名の「希望あふれる子供たち」をタイ王国海軍施設に招き、海水浴やさまざまなアクティビティを行った。参加者は、FHCPのボランティア・スタッフ約50名と共に運営に参加し、子供と共に生活・活動することを通じて、国際協力活動を実践し、国際協調の精神を養った。FHCP前には、彼らが生活する児童養護施設3か所を訪問し、子供たちがおかれている状況について理解を深めた。

日程	活動	宿泊
3月18日（月）	バンコク集合・準備研修	バンコク
3月19日（火）～20日（水）	児童養護施設に宿泊、ボランティア活動や川遊びを体験	カーンチャナブリー県
3月21日（木）	バンコク郊外の児童養護施設を訪問	バンコク
3月22日（金）～25日（月）	子供キャンプFHCPに参加し現地ボランティア・スタッフと協働	チョンブリー県
3月26日（火）	バンコクにて解散	



（左）カーンチャナブリー県の児童養護施設で子供たちと記念撮影をする



（中）カーンチャナブリー県の児童養護施設で子供たちに折り紙を教える



（右）子供キャンプFHCPで子供たちと海水浴をする

B. 国際交流リーダー養成セミナーの実施

B-1 国際交流リーダー養成セミナーの実施

<概要>

テーマ：グローバルコミュニケーションの未来～ロジカルな対話のすすめ：お互いを認め、異文化理解を促進するために～

主催：一般財団法人青少年国際交流推進センター

共催：株式会社リーズ・トランサポート

協力：日本青年国際交流機構（IYEO）

日時：令和6年3月10日（日）9:30～16:30

講師：莉々紀子氏 IT・エグゼクティブ向け同時通訳、
株式会社リーズ・トランサポート代表

参加者：30名



莉々紀子氏と参加者

<内容>

「異文化理解」に関する講義では、月の見え方や太陽の色、虹を構成する色の数や種類などの具体例から、同じものを見ていても国や文化、個人によって見る角度や表現方法は様々であるという話があり、その後、グループに分かれて「日本にしかないもの」と「海外で驚いた文化」を出し合った。国際交流の経験が豊富な参加者からは様々なカルチャーショックの事例が挙げられたが、一歩踏み込んだ莉々氏の質問で、なぜそれが日本にしかないのか、日本には本当にはないのか、カルチャーショックの背景にあるものを考えるきっかけとなった。

その後、コミュニケーションにおいては言語情報より非言語情報の方が重要であるという「メラビアン法則」が紹介された。言語情報（メッセージ）と非言語情報（声のトーンや表情、姿勢など）を一致させることが重要で、無意識にしている表情などが、もしかしたら相手に誤解を与えているかもしれないことを学んだ。

前半最後のプログラムとして、「ルルンバ文化を探れ！」というワークを行った。架空の「ルルンバ人」5名と「専門家」25名に分かれ、ルルンバ人がどんなコミュニケーション文化を持っているのか、様々な質問を投げかけながら探っていく。専門家となった参加者たちにとって、どんな質問をすれば解明できるか等コミュニケーションの根本に立ち返る時間になっていたようである。普段会話する中で気に留めないようなことにも着目する機会になったという感想があり、異文化コミュニケーションを疑似体験することで、参加者たちはそれぞれに Unconscious Bias を少なからず持っていることに気付かされたようだった。

前半の講義やワークを通じ、無意識のうちに先入観を持っていることを自覚し、多様な価値観があることに気付くこと、互いの違いを理解し、関係を構築する能力（異文化コンピテンシー）を身に付けることが、グローバルコミュニケーションで必要不可欠であるということも学ぶ機会にもなった。

後半は、相手にいかにロジカルに物事を伝えるかという視点から「FAB Talk プロセスモデル」「PREP 法」、そして「ハイコンテキスト文化」と「ローコンテキスト文化」について学んだ。価値観や感覚といったコンテキスト（文脈や背景）に大きく依存する「ハイコンテキスト文化」か、コミュニケーションがほぼ言語を通じ行われ、文法も明快で曖昧さがない「ローコンテキスト文化」か、国や言語によって傾向が分かれる。日本は究極のハイコンテキスト文化だと言われるそうで、ハイコンテキストによって誤解が生じうることを実際に起きた事例を通じて理解した。相手に理解を委ねるのではなく、共通認識がないという前提のもと、ローコンテキストの姿勢を取っていくことが大切である。

最後にグループに分かれて「NASA ゲーム」を行った。グループで話し合いながら全員で一つの結論を導き出すことを目的とした合意形成を行うゲームで、今回のセミナーを通じて学んだコミュニケーションスキルを早速実践する機会となった。ロジカルに伝える工夫、姿勢や表情、前提条件の共有など、個々人がこの日学んだことを思い返しなが、コミュニケーションをとっており、それぞれに合意形成の取れた回答を導き出せていたようだ。

B-2「イスラームを知ろう！」の実施

様々な価値観を受け入れ、多様性の理解を促進するための一助として、イスラームを知るセミナーを3回実施した。そのうち2回は対面の体験型交流も実施した。

〈主催〉 一般財団法人青少年国際交流推進センター

〈協力〉 日本青年国際交流機構（IYEO）

【第11回】令和5年6月25日（日）14:30～17:00

イスラームを知ろう！～トルコ料理教室（チーキョフテ）～【現地参加（東京都）】

講師：Kargi Kerem Kadir（ケレム）（Yıldız Turkish Restaurant オーナー）

Kargi Mustafa（ムスタファ）（Yıldız Turkish Restaurant シェフ、元トルコ大使館シェフ）

Ramazan Demiroglu（ラマザン）（Yıldız Turkish Restaurant シェフ）

参加者：20名



第11回「イスラームを知ろう！～トルコ料理教室（チーキョフテ）～（シェフのケレム氏とラマザン氏（左）、グループで料理をつくる参加者（中央）、集合写真（右））

【第12回】令和5年7月22日（土）15:00～17:00

イスラームを知ろう！～日本人ヤングムスリムのストーリー：マスジド大塚とともに「モスク/炊き出し見学」～【現地参加（東京都）】

共催：日本イスラーム文化センター マスジド大塚

オープニング挨拶：日本イスラーム文化センター事務局長 クレイシ・ハールーン

スピーカー：長谷川 護 慶應義塾大学総合政策学部4年 野中葉研究会ムスリム共生プロジェクト

参加者：17名



第12回「イスラームを知ろう！～日本人ヤングムスリムのストーリー：マスジド大塚とともに「モスク/炊き出し見学」～（セミナーの様子（左）、ボランティアと交流する参加者（中央）、集合写真（右））

【第13回】令和5年9月23日（土）15:00～17:00

イスラームを知ろう！～「日々の暮らしに生きるイスラーム文明」現代社会の礎はイスラーム科学で大きく拓かれた～【オンラインセミナー】

スピーカー：ハムダ なおこ 日本 UAE 文化センター代表、作家、翻訳家、エッセイスト

参加者：33名



第13回「イスラームを知ろう！～「日々の暮らしに生きるイスラーム文明」現代社会の礎はイスラーム科学で大きく拓かれた～」の参加者

C. 国際理解教育支援プログラムの実施

内閣府青年国際交流事業既参加者等の在日外国青年及び内閣府青年国際交流事業に参加し、事後活動として国際理解教育に熱意を有する者を日本の学校等に派遣して、国際理解の推進に資することを目的として実施している。

【第1回】令和5年8月26日 東京都立立川国際中等教育学校附属小学校

1、2年生（140名）を対象に、外国人講師（ベトナム）2名を派遣。外国人講師の国の紹介（位置、世界遺産、食べ物、民族衣装など）の後、外国人講師の国の遊び等を児童と一緒にを行った。



東京都立立川国際中等教育学校附属小学校

【第2回】令和5年10月14日 茨城県立並木中等教育学校

ファシリテーター1名とディスカッション・パートナー8名（ペルー、バングラデシュ、エジプト、スリランカ、インドネシア、ウガンダ、アメリカ、ブラジル）を派遣。5学年（高校2年生、約140名）が八つのグループに分かれて自己紹介し、八つのディスカッション・トピックに沿った各国事情を生徒が外国人ディスカッション・パートナーに質問した後、生徒から日本事情をプレゼンテーションした。その後、ディスカッション・パートナーから生徒へフィードバックを行った。



茨城県立並木中等教育学校

【第3回】令和5年12月18日 中野区立江古田小学校

6年生（70名）を対象に外国人講師3名（エジプト、アルベニア、ブラジル）を派遣。小グループに分かれて、外国人講師と児童との自己紹介をした後、児童から中野や江古田（地域）の特色、江古田小学校の生活、日本文化等の紹介を行った。その後、外国人講師から児童へフィードバックを行った。

2. 内閣府等の実施する青年国際交流事業への協力

令和 5 年度「日本・中国青年親善交流事業（オンライン交流）」及び「日本・韓国青年親善交流事業」に関する運営業務、「東南アジア青年の船」事業、「世界青年の船」事業支援業務を内閣府との契約により実施した。

また、内閣府青年国際交流事業の既参加青年の活動を支援する「令和 5 年度青少年国際交流事業の活動充実強化における支援業務」についても内閣府と契約をし、青少年国際交流事業事後活動推進大会等の開催を行った。

A. 内閣府の実施する青年国際交流事業への協力

(1) 日本・中国青年親善交流事業（オンライン交流）

<目的>

本事業は、日本と中国の青年の交流を通じて、青年相互の友好と理解を促進し、日本青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会で指導性を発揮できる青年を育成するとともに、青年による青少年育成活動等の社会貢献活動への寄与を目的としている。令和 2 年度以降は、コロナ禍の状況を踏まえオンライン形式により実施している。

<実施概要>

(a) ディスカッションテーマ及びサブテーマ

「新時代に求められる日中青年の使命」（サブテーマ）文化／デジタル経済／気候変動（自然災害）への対応／教育／少子高齢化

(b) 参加青年人数

日本参加青年 24 名、中国参加青年 25 名

(c) 日程

事前研修

1 日目：令和 5 年 10 月 1 日
（日）

2 日目：令和 5 年 10 月 7 日
（土） ※両日とも 13:00
～17:00 で実施

中国参加青年とのオンライン交流

「日中代表ユースフォーラム」

令和 5 年 11 月 19 日（日）

※日本時間 10:30～

18:00 で実施

事後研修

令和 5 年 12 月 2 日（土） 13:00～17:00

事業報告会

令和 6 年 2 月 3 日（土） 13:00～15:00

(d) 報告書

内閣府青年国際交流事業報告書 2023 令和 5 年度日本・中国青年親善交流事業「日中代表ユースフォーラム」の編集（日本語）、印刷及び発送を行った。



日中両国参加青年・関係者による集合写真（日中代表ユースフォーラム）

(2) 日本・韓国青年親善交流事業

<目的>

本事業は、日本と韓国の青年の交流を通じて、青年相互の友好と理解を促進し、日本青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会で指導性を発揮できる青年を育成するとともに、青年による青少年健全育成活動等の社会貢献活動への寄与を目的としている。

本年度は4年ぶりに対面交流が復活し、日本青年韓国派遣と韓国青年日本招へいの両プログラムが実施された。

<実施概要>

(a) 日本青年韓国派遣

韓国に、団長、副団長、渉外を含む日本参加青年30名が令和5年10月18日から11月1日まで派遣されることに伴い、日本国内での研修、諸準備のほか、内閣府の行う訪問国活動のプログラム調整に際し、必要な情報提供及び支援を行った。

項目	内容	月日
団長・副団長・渉外会議	日本・韓国青年親善交流事業の団長・副団長・渉外会議を実施した。このほか、日本国内の研修の際に同会議を適宜開催した。	6月22日
事前調査	事前調査のため韓国に当センター職員2名を派遣した。	10月5日～6日
研修	日本参加青年に対し、研修を下記のとおり行った。	
	事前研修	合宿形式： 7月5日～8日 オンライン形式： 7月15日、22日
	出発前研修	10月16日～17日
	帰国後研修	11月2日～3日
日本青年韓国派遣の訪問国活動に関する支援業務等	(i) 内閣府が韓国政府機関等及び日本国大使館と行う日程協議に際し、訪問先や日本参加青年の要望に関する情報提供等の支援業務を行った。 (ii) 韓国語による派遣活動日程最終案を和訳して資料を作成し、日本参加青年及び内閣府等に配布した。 (iii) 日本参加青年の急病等不測の事態が生じた場合にその対応について内閣府に協力することとした。	訪問国活動： 10月18日～11月1日
事業評価アンケート	帰国後の団長、副団長、渉外及び日本参加青年に対し、事業評価アンケートを作成、実施及び集計をした。	回収期間： 11月2日～20日
事業報告会	第34回日本・韓国青年親善交流事業に参加した青年が、事業に参加して得た知識や経験等について国際交流に関心がある一般の青少年等に向けてオンラインで報告を行った。当該事業に参加した青年のうち有志6名によって実行委員会が組織され、報告会の企画及び運営に携わった。当日は約70名が参加した。	令和6年2月10日



(左) 事前研修で駐日韓国文化院を訪問
 (中) 訪問国活動で韓国青年と交流する
 (右) 訪問国活動で韓国青年とディスカッションを行う

(b) 韓国青年日本招へい

韓国 30 名の日本国内プログラムを令和 5 年 8 月 22 日から 9 月 5 日までの 15 日間、東京都、富山県及び青森県で実施した。

(i) 東京プログラム

項目	内容	月日
表敬訪問	韓国青年は由布和嘉子内閣府青年国際交流担当室長を表敬訪問し、プログラムへの期待等に関する質問を受けた。	8月22日
歓迎会	由布和嘉子内閣府青年国際交流担当室長主催による歓迎会が開催された。韓国青年は、内閣府幹部を始め、青少年団体関係者、青年国際交流事業既参加者等多くの出席者の前で、文化紹介としてダンスや歌等を披露した。	8月23日
課題別視察【防災】	防災をテーマに、首都圏外郭放水路を訪問した。韓国青年は、施設の概要について説明を受けた後、立杭や調圧水槽等の実際設備を見学し、洪水対策について理解を深めた。「日本では以前から非常に大きく長い放水路を作って洪水に備えている点がとてもいっしょでよかった。」「首都圏にこのような施設があることを初めて知り、地形的な問題とその解決方法について知ることができて良かった。」等の感想があった。	8月23日
	東京消防庁池袋防災館を訪問した。地震体験や消火体験等を通じ、災害に対する備えや実際の発生時における対処法について理解を深めた。	8月24日
課題別視察【地方創生】	特定非営利活動法人 100 万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センターを訪問した。日本における人口減少に伴う課題や地方移住の実情等の説明を受け、地方創生について考えるきっかけとなった。韓国青年からは「地域活性化に向けた日本の政策について詳しく知ることができ、多様な考え方を聞き、多くのことを学んだ時間だった。」「日本での活動期間中、一番良い学びの時間だったし印象深かった。今回のプログラムを通じて地域活性化に関する日本の方針やその実態について実体験に基づいた話を聞くことができ、考えさせられる良い時間だった。」等の感想があった。	8月24日
都内体験プログラム	日本青年の案内の下、3 グループに分かれ、お台場エリア、浅草エリア、秋葉原エリアを回り、日本文化を学びながら日韓両国の青年は交流を深めた。	9月4日
評価会	事業の成果を振り返るため、「本事業に参加して学んだこと」「今後この経験をどのようにいかしていきたいか」「プログラムの要望等」の 3 点についてグループ・ディスカッションを行った。	9月4日
歓送昼食会	由布和嘉子内閣府青年国際交流担当室長主催による歓送昼食会が開催された。	9月4日
事業評価アンケート	帰国後の韓国参加青年に対し、事業評価アンケートを作成、実施及び集計をした。	9月6日～20日

(ii) 日韓青年親善交流のつどい

項目	内容	月日
日韓青年親善交流のつどい	<p>千葉県富里市にあるインターナショナルリゾートホテル湯楽城において、日韓青年親善交流のつどいを開催した。参加者は、韓国青年代表団、内閣府青年国際交流事業既参加青年及び一般参加青年からなる日本青年と日韓青年親善交流のつどい実行委員の約80名であった。</p> <p>本年度は「まるっとチングハジャ」というテーマを設定した。「チングハジャ」は韓国語で「友達になろう」という意味で、互いの言語ができなくても「チングハジャ」の一言で、両国の青年同士が「まるっと」つながってほしいという思いを込めた。</p> <p>プログラムは、実行委員が企画したディスカッションや日韓文化交流の夕べ等で構成された。ディスカッションでは、五つのテーマに分かれ、それぞれ両国の現状や問題点、解決方法等を意見交換した。日韓文化交流の夕べでは、両国の青年がプレゼンテーションやダンスパフォーマンス等を行い、互いの文化に触れる機会になった。また、テーマにちなんで全員で円になって盆踊りを踊り、日本の夏の伝統行事を体験した。</p> <p>日韓両国の青年たちは、このような様々な活動を通じて互いに友好と理解を深めた。</p>	8月25日～27日

(iii) 地方プログラム

項目	内容	月日
受入県会議	地方プログラムの訪問県、担当者及び実行委員会の代表者と地方プログラムを実施するための会議をオンラインで実施した。	6月19日、22日
地方プログラム	富山県及び青森県の両県で行った。訪問県、日本青年国際交流機構並びに関係団体の協力を得て、富山県では地元青年とのディスカッションや施設訪問、青森県ではホームステイを中心にプログラムが組み立てられ、各地域の特色を存分に感じられる内容であった。	8月27日～9月3日



(左) 歓迎会で韓国青年が文化発表を行う



(中) 日韓親善交流のつどいの参加者全員で記念撮影



(右) 地方プログラムで伝統工芸を体験する

(b) 報告書等

項目	内容
報告書	『内閣府青年国際交流事業報告書 2023 第34回日本・韓国青年親善交流事業』の編集、印刷及び発送を行った。

地方プログラム	『令和5年度（第34回）日本・韓国青年親善交流事業（日本青年韓国派遣）参加者レポート集』の編集、印刷及び発送を行った。
---------	---

(3) 第47回「東南アジア青年の船」事業

<目的>

令和5年度「東南アジア青年の船」事業は、日本及び東南アジア諸国連合の青年が、オンライン交流と対面交流による各種の交流活動を行うことにより、青年相互の友好と理解の促進、青年の国際的視野の拡大、国際協調精神の醸成及び国際協力における実践力の向上を図り、もって国際化の進展する社会の各分野で指導性を発揮することができる次世代リーダーを育成することを目的とする。

<実施概要>

(a) 事業内容

本事業は、これまで実施してきた SSEAYP の特徴を生かしながら、オンライン交流及び 10 日間の対面交流によるハイブリット方式において、ディスカッションや地方プログラムなどの各種の研修や交流活動を実施した。



オンライン交流プログラムの様子

ディスカッション活動は、「日本 ASEAN 友好協力 50 周年を迎えた新たな協力の時代に青年ができること」をテーマとし、今後さらなる関係発展が見込まれる我が国と ASEAN との間の共通課題や、将来的により一層協力していくことのできる分野等について、青年として何ができるか、どう行動に移すべきか、5つの分野（1. 質の高い教育、2. ジェンダー平等、女性活躍の推進、3. 経済成長と住み続けられるまちづくり、4. エネルギー、気候変動対策、循環型社会、5. 健康とウェルビーイング）ごとにディスカッションを行った。この5つのグループは、それぞれの専門家でもあるファシリテーターによって運営された。

(b) 参加青年人数

日本参加青年 20 名

ASEAN 9 か国の参加青年 90 名（ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム） 合計 110 名

(c) 日程

【日本参加青年事前研修】

1 回目（オンライン）：令和5年9月24日（日）14:00～18:00

2 回目（対面実施）：令和5年10月28日（土）～29日（日）

【オンライン交流プログラム】

1 日目：令和5年11月12日（日）（開講式、基調講演、グループ・ディスカッション I）

2 日目：令和5年11月19日（日）（NL セッション、SG ミーティング、グループ・ディスカッション II）

【対面交流プログラム】

令和5年11月29日（水）～12月8日（金）

【日本参加青年事後研修】

令和5年12月8日（金）～9日（土）

【「東南アジア青年の船」事業報告会】

令和6年1月21日（日）14:00～18:00

(d) 対面交流プログラム内容

①中央プログラム

- 参加者代表者による佳子内親王殿下御引見
- 参加者代表者による内閣総理大臣表敬訪問
- グループ・ディスカッション

本年度のディスカッション活動テーマを「日本 ASEAN 友好協力 50 周年を迎えた新たな協力の時代に、青年ができること」とし、SDGs を内容とした5つのグループ・テーマ（1. 質の高い教育、2. ジェンダー平等、女性活躍の推進、3. 経済成長と住み続けられるまちづくり、4. エネルギー、気候変動対策、循環型社会、5. 健康とウェルビーイング）に分かれて、ファシリテーターの指導の下、ディスカッションを行った。

●課題別視察

ディスカッション・テーマに沿った関連施設への訪問を通し、日本の事例を学び、テーマに対する知見を深めた。

●事後活動セッション

参加青年が事業終了後に社会活動を行う際に必要な、具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取り組み方を各国の事後活動組織代表者から学んだ。

●自主活動

参加青年の自発的なアイデアにより、自由に企画し実践する活動として実施した。

●成果発表会

事業から得られた成果について、グループ・ディスカッションの学びとコミットメントを報告した。

②地方プログラム

全国5県（山形県、山梨県、愛知県、長崎県、鹿児島県）のうち、SGごとに1か所を訪問し、ホームステイや日本・ASEAN 青年交流プログラムを通じて地元青年との交流を深め、地方の理解に繋げた。



対面交流での全参加者

③日本 ASEAN 友好協力 50 周年記念行事

1973 年以來、目覚ましい発展を遂げてきた日本と ASEAN の関係は、2023 年に友好協力 50 周年を迎えた。これを、関係各国政府及び関係各位に対する謝意の表明と今後の一層の協力を要請する機会とするために、参加各国政府及び事後活動組織の代表者を日本に招へいた。

参加各国政府及び事後活動組織の代表者は、12 月 6 日から 9 日の 4 日間日本に滞在し、12 月 7 日午後ホテルニューオータニ東京において開催された日本 ASEAN 友好協力 50 周年記念交流会に参加した。記念交流会には、第 47 回事業参加者（NL 及び PY 等）も出席し、来賓として在京東南アジア各国大使にも御出席いただいた。12 月 8 日には、午前に参加各国政府及び事後活動組織の代表者は令和 5 年度第 2 回関係各国連絡会議に、また午後には事後活動組織の代表者は事後活動推進会議に出席した。

(e) 報告書

内閣府青年国際交流事業報告書 2023 令和 5 年度「東南アジア青年の船」事業の編集（日本語・英語）、印刷及び発送を行った。

(4) 「世界青年の船」事業

<目的>

グローバル化が進展する現代において、国際社会・地域社会を牽引する次世代リーダーが求められている。こうした観点から、「世界青年の船」事業（SWY）は、世界各地から多様なバックグラウンドを持つ青年が集い、ディスカッションやワークショップ、文化交流を通じて異文化対応力、コミュニケーション力、リーダーシップ、マネジメント力の向上を図ることで、これらの能力を発揮して国際化の進展する社会に多大な貢献ができる青年を育成し、併せてグローバルな人的ネットワークを構築することを目的に実施されている。

令和 2 年に拡大した新型コロナウイルス感染症により、その後 2 年間は、青年及び事業関係者の安全を十分に確保することが困難であることから、船上における活動を中心とした対面交流を中止し、オンライン方式により事業を実施してきた。今年度は昨年度実施したハイブリッド形式の特色を残しつつ、従来の船プログラムが復活した。新たに地域訪問活動・地域実践活動がプログラムに組み込まれ、1 か月間の対面交流が行われた。

<実施概要>

(a) 参加国・参加者数

● 参加国

アルゼンチン共和国、エチオピア共和国、フランス共和国、インド共和国、アイルランド、日本、ヨルダン・ハシエミット王国、ケニア共和国、メキシコ合衆国、ニュージーランド、ソロモン諸島、トルコ共和国、アラブ首長国連邦、ザンビア共和国

● 参加者数

日本：ナショナル・リーダー（NL）1 名、サブ・ナショナル・リーダー（SNL）1 名、参加青年（PY）91 名

日本以外の各国：ナショナル・リーダー（NL）13 名（各国 1 名）、参加青年（PY）117 名（各国 10 名）



オンライン交流での様子

(b) 事業日程

【日本参加青年事前研修】

令和5年8月30日（水）～9月3日（日）

【オンライン交流1（エチオピア、フランス、インド、アイルランド、日本、ヨルダン、ケニア、トルコ、アラブ首長国連邦、ザンビア）】

※全日程において、17:00～20:00（日本時間）で実施

1日目：令和5年11月4日（土）（開講式・オリエンテーション（全体会）、コース・ディスカッション①）

2日目：令和5年11月11日（土）（レター・グループ・ミーティング、委員会ミーティング、コース・ディスカッション②）

3日目：令和5年11月25日（土）（寄港地活動準備、コース・ディスカッション③）

【オンライン交流2（アルゼンチン、日本、メキシコ、ニュージーランド、ソロモン諸島）】

※全日程において、8:00～11:00（日本時間）で実施

1日目：令和5年11月5日（日）（開講式・オリエンテーション（全体会）、コース・ディスカッション①）

2日目：令和5年11月12日（日）（レター・グループ・ミーティング、委員会ミーティング、コース・ディスカッション②）

3日目：令和5年11月26日（日）（寄港地活動準備、コース・ディスカッション③）

【仮想空間における交流】

令和5年11月4日（土）～令和6年2月29日（木）

【対面交流】

令和6年1月24日（水）

～2月21日（水）

【日本参加青年事後研修】

令和6年2月21日（水）

～22日（木）

(c) 対面交流プログラム内容

①中央プログラム

- 参加者代表者による秋篠宮佳子内親王殿下御引見

- 課題別視察

日本の文化及び社会について自ら体験し理解を深めた。

- 自主活動

参加青年の自発的なアイデアにより、自由に企画し実践する活動として中央プログラムと船上プログラムで実施した。

②船上プログラム

- コース・ディスカッション

SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）を共通テーマとした、10のテーマ（1.ジェンダー平等、2.共生社会の実現、3.質の高い教育の提供、4.青少年のエンパワーメント、5.地域の伝統と歴史の継承、6.魅力あるまちづくり、7.防災教育とツーリズム、8.防災対策、9.環境保護と観光、10.自然と寄り添う暮らし）に分かれて、ファシリテーターの指導の下、ディスカッションを行った。

- ピア・ラーニング・セミナー

全参加青年は、ピア・ラーニング・セミナーの各コマにおいて、主催者あるいは参加者となった。ピア・ラーニング・

セミナーは、主催者がこれまで勉強してきたこと又は経験してきたこと等について参加青年と共有し議論する活動として実施した。主催者以外の参加青年は、当日参加したいピア・ラーニング・セミナーに自由に参加することができた。

●事後活動セッション

参加青年が事業終了後に社会活動を行う際に必要な、具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取り組み方をファシリテーターから学んだ。

●地域訪問活動

京都府及び兵庫県において、表敬訪問、施設訪問、視察、文化体験及び地域青年との交流などを行った。

●地域実践活動

高知県において、SDGs などの社会課題に取り組む地域 NPO 等と協力しながら、具体的なプロジェクトのプランニングを行い、実際に現場に入ってプロジェクトを実施するまでの一連の過程の協働作業を行った。施設の視察などはコース・ディスカッション毎に行われた。

●サマリー・フォーラム

事業から得られた成果について、主にコース・ディスカッションの学びとコミットメントを報告した。

●参加者代表者による内閣総理大臣表敬訪問

(d) 報告書等

「内閣府青年国際交流事業報告書 2024 令和 5 年度「世界青年の船」（日本語・英語）の編集、印刷及び発送を行った。



対面交流での全参加者

(5) 青少年国際交流事業の活動充実強化における支援業務

(a) 青少年国際交流を通して国際社会や地域社会への貢献を考えるつどい（ブロックイベント）の開催

全国の4ブロックにおいて、内閣府及び地方公共団体が行う青少年国際交流事業の既参加青年、国際交流に関心のある青少年等が、事後活動に関する情報交換や地域、職域の特色をいかした事後活動について意見交換を行うことにより、地域における既参加青年等のネットワークを強化し、国際交流活動や青少年の育成活動を活性化させることを目的に、令和5年度は次のとおり開催した。

ブロック	開催県	内容	日付
北海道・東北ブロック	秋田県	オンライン	令和6年1月20日
東海ブロック	愛知県	ハイブリッド	令和6年3月16日
中国ブロック(全国大会)	鳥取県	ハイブリッド	令和5年9月30日、10月1日
九州ブロック	大分県	対面	令和5年12月3日



ブロックイベントでのパネルディスカッションや分科会の様子

(b) 青少年国際交流事業事後活動推進大会の開催

全国から内閣府及び地方公共団体等が行う青少年国際交流事業の既参加青年等が集まり、各地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、既参加青年等の全国的なネットワークの構築など事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行うものである。

項目	内容	日付
青少年国際交流事業事後活動推進大会	既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するため、鳥取県（ハイブリッド）で開催し、全国から149名が参加した。なお、この大会は日本青年国際交流機構第39回全国大会と当センターの主催する第30回青少年国際交流全国フォーラムとを併せて開催されたものである。	令和5年 9月30日、 10月1日



青少年国際交流事業事後活動推進大会での集合写真

(c) 青年国際交流事業事後活動推進全国代表者会議の開催

内閣府青年国際交流事業の説明及び日本青年国際交流機構の活動状況に関する報告と、その活動を踏まえた情報交換並びに国際交流及び国際親善についての意見交換を行い、国際交流活動や青少年育成活動を活性化することを目的として、日本青年国際交流機構役員及び都道府県青年国際交流機構代表者の出席のもとオンラインおよび対面で行った。

項目	内容	日付
青年国際交流事業事後活動推進全国代表者会議	ハイブリッド	令和5年9月29、30日
	オンライン	令和6年3月9日

(d) 内閣府青年国際交流事業説明会の実施

内閣府が実施する青年国際交流事業の概要説明や既参加青年が体験談等を報告する事業説明会を令和6年2月2日～3月22日に5回実施した。実施に当たっては、既参加青年の協力を得て、事業参加を通じて得た知識や経験、事業の本質や参加することの意義や価値を来場者に直接伝えた。

項目	内容	日付
内閣府青年国際交流事業説明会	オンライン	令和6年2月2日
内閣府青年国際交流事業説明会	オンライン	令和6年2月15日
内閣府青年国際交流事業説明会	オンライン	令和6年2月26日
内閣府青年国際交流事業説明会	オンライン	令和6年3月5日
内閣府青年国際交流事業説明会	オンライン	令和6年3月22日

(e) メールマガジンによる情報発信に係る原稿作成、青年国際交流事業事後活動年次概要・資料集及び募集広報用冊子の作成・発送

	内容
メールマガジン	内閣府青年国際交流事業並びに既参加青年の地域における事後活動状況等を紹介したメールマガジンを10本作成および校正した。
青年国際交流事業事後活動年次概要・資料集	内閣府青年国際交流事業の概要、歴史、実績及び参加青年の事後活動を紹介した「令和4年度青年国際交流事業事後活動年次概要・資料集」を編集及び印刷し、関係箇所に発送した。
内閣府青年国際交流事業事後活動ニュース	内閣府青年国際交流事業の事後活動に関する原稿の作成及び印刷し、関係箇所に発送した。

(f) 既参加日本青年フォローアップ調査の実施

内閣府青年国際交流事業既参加青年の事後活動に関する意識調査を実施した。調査事項は、青年国際交流事業への参加による意識の変化、青年国際交流事業参加の成果とし、対象は平成30年度及び令和4年度とした。

B. 他団体の国際交流事業への協力

- (a) 公益財団法人 統計情報研究開発センター主催のアセアン・南アジア統計職員招聘事業(石橋信夫記念国際交流事業)が令和5年8月28日～9月15日(研修期間8月29日～9月14日)に実施されるにあたり、アジアからの11名の招へい者の都内及び地方プログラムに運営スタッフとして同行し、報告書の作成を行った。
- (b) 「未踏的な地方の若手人材発掘育成支援事業費補助金(AKATSUKIプロジェクト)」採択事業 Social Innovation Program Co-Do(コード)の実施に際し、一般社団法人 東海若手起業塾実行委員会の依頼で、Social Innovation Program Co-Do Stage02「越境」海外越境プログラムにて、シンガポールへの派遣プログラムの協力として、現地でのプログラムコーディネート及び関係者の紹介業務を行った。

3. 青少年国際交流に関する啓発及び研修の概況

A 推進委員会議

1. 第1回会議

開催月日 令和5年9月29日(金)、10月1日(土)

開催場所 鳥取県米子市 ハイブリッド開催

一般財団法人青少年国際交流推進センター事業報告及び計画等

- 1 内閣府からの令和5年度青年国際交流事業関連の契約
- 2 個人会員(推進委員に対する旅費支給)、団体会員(活動奨励金交付要領並びにブロック会議等に対する補助金の交付)について
- 3 その他

2. 第2回会議

開催月日 令和6年3月9日(土)

場 所 オンライン開催

一般財団法人青少年国際交流推進センター事業報告及び計画等

- 1 内閣府からの令和5年度青年国際交流事業関連の契約
- 2 個人会員、団体会員について
- 3 IYEOとセンターの在り方について

B. 第30回青少年国際交流全国フォーラム

全国各地で国際交流活動に携わる指導者及び青年を対象に、学識経験者の講演及び各地域における青少年国際交流活動に関する事例発表、討論等を行うもので、青少年国際交流事業事後活動推進大会及び日本青年国際交流機構の第39回全国大会鳥取大会とともに、ハイブリッドにおいて参加者149名を得て開催した。(令和5年9月30日、10月1日)

【内容】

1. パネルディスカッション(13:45～15:30)

「自らの生き方を創る～国際・地域課題解決のヒント～」をテーマに、地域やグローバルステージでリーダーシップを発揮している6名のパネリストとモデレーターから、生き方の見つけ方・作り方、向き合っている地域課題、解決に向けたヒント等を、軽快なトークでディスカッションしていただいた。

2. 分科会 (15:45～17:30)

充実した内容の8つの分科会を開催した。パネルディスカッションのスピーカーやモデレーターの話をもとに掘り下げて聞かせるための分科会や、オンライン参加者のためのオンライン開催の分科会など工夫を凝らした分科会を開催した。

3. 事業参加報告会(19:10～19:30)

2022年度「世界青年の船」事業の既参加青年より、参加事業報告をもらった。久しぶりの一部、対面交流の復活で、国際交流における対面交流の大切さを実感する報告となった。

C. 団体会員のブロックイベント(青少年国際交流を考える集い)

内閣府青年国際交流事業の既参加者の地域における活動の活性化を主な目的として、ブロックイベント(青少年国際交流を考える集い 第2部)を日本青年国際交流機構、開催都道府県 IYEO と共催した。(令和5年9月～令和6年3月)(P.15を参照)

4. 青少年国際交流に関する出版物の刊行及び広報活動の概況

A. 機関誌の刊行

国内及び海外における青少年国際交流活動の紹介などを中心とした情報誌である「MACROCOSM」を年1回(A4版)刊行した。132号は500部を発行し、関係箇所に配布するとともに、ホームページ上にも公開し、広く閲覧ができるようにした。

B. 年報の刊行

令和4年度における内閣府青年国際交流事業及びこれに参加した青年による国際交流活動等の概要、青少年国際交流に関する情報や資料を収集、整理した「令和4年度年報 青年国際交流事業と事業参加者の事後活動」をPDF版にて作成した。

C. ホームページの更新・オンラインメディアの活用

当センターのホームページを刷新し、団体概要及び事業内容、募集案内等を広く公開した。合わせて、Facebook、Instagram等のSNSを活用し、事業の広報、参加者募集の呼びかけ等を行った。



新しくなった(一財)青少年国際交流推進センターのホームページ

D. 一般財団法人青少年国際交流推進センターパンフレットの配布

当センターの事業内容を紹介したパンフレットを広く配布した。

5. 青少年国際交流に関する情報収集及び調査研究の概況

A. 青少年国際交流事業に関する情報収集

内閣府の実施した青年国際交流事業の既参加青年等の名簿の整備を行った。

B. 青少年国際交流に関する調査研究

内閣府の実施した青年国際交流事業の既参加青年のその後の活躍状況について、日本青年国際交流機構の都道府県における各組織並びに「東南アジア青年の船」事業及び「世界青年の船」事業の事後活動組織を通じて調査を行った。

6. 青少年国際交流に関する支援・コンサルティング等の概況

A. 活動奨励金等の交付

都道府県団体会員の地域における国際交流活動の一層の活性化を図ることを目的に、活動奨励金交付要領に基づき、令和5年度は、31都道府県の団体会員に対し102件153万円の活動奨励金を交付した。また、ブロック会議等における県外報告者の旅費及び外国青年の参加費の補助として、ブロック会議等に対する補助金の交付要領に基づく補助金の交付は今年度は該当者なしだった。

B. コンサルティング事業等

1. ドイツの青少年国際交流団体であるIJABの依頼により、団体の機関紙IJAB Journalへの寄稿の依頼があり、事務局長が青少年育成の日本の状況、CENTERYEとIJABの連携についての記事を提供した。

本事業報告について、補足すべき重要な事項はないので、
附属明細書は作成していません。